

農村計画委員会活動報告 Research Committee on Rural Planning and Design

農村計画委員会設立50周年イヤーの覚書

Memorandum of the Year 50th Anniversary of the Establishment of the Rural Planning Committee

山崎寿一 2016年度委員長、神戸大学大学院教授

Juichi Yamazaki

2016年4月に委員長が交代し、「建築系農村計画のアイデンティティの探究と新たな計画学の探求」「世代間・学会内外の連携推進の場となるプラットフォームの提供」を基本方針に掲げて、新委員会がスタートした。

農村計画委員会は、1967年1月に設置され、50周年を迎えた。本年を「農村計画委員会設立50周年イヤー」と位置づけて、創生期から現在に至る大会農村計画部門研究協議会資料のアーカイブ化を進めるとともに、2017年1月には設立50周年を記念した「農村計画拡大本委員会」を開催した。ここでは設立時の委員であった荻原正三工学院大学名誉教授をゲストに迎え、歴代委員長・幹事(重村、三橋、岡田、糸長)、現役主査(柳田、佐久間、工藤、三笠、西田[神吉代理]、斎尾[熊野代理]、後藤、川嶋)を報告者に、「建築系農村計画のアイデンティティを探求し、未来を創造・探求する」をテーマに討論した。

農村計画委員会の存在意義が問われるなか、「震災復興から俯瞰する未来社会と計画学——農村からの発信」をテーマに大会研究協議会を開催し、見えがくれする震災復興の深層から、農村居住、コミュニティ、地域づくりの未来を構想し、次世代の計画学を探求する討論の場を提供した。ここでは、東日本大震災(広田純一)、中越大地震(澤田雅浩)、熊本地震(柴田祐)を俯瞰した計画課題の報告に加え、「設計科学論」(山崎寿一)、「破局的計画論」(糸長浩司)、「い・いし・いしき論」(木下勇)等、新たな計画論も提起され、学術、社会、計

画のパラダイム転換における計画学の研究方法論が熱く議論された。

国土スケールで地域と生活をとらえる視座を持つ本委員会の特徴を示した活動として、「鄙へ向かう人々——『暮らすこと』の楽しみを創る」をテーマに大会PDを開催。集落居住小委員会は、「むらを住み継ぐカタチ」シリーズとして、瀬戸内の離島「小佐木島」でのアートな島おこし、北海道の富良野・ニセコでの「よそ者、観光・滞在者を巻き込んだ新たな地域づくりのカタチ」をテーマとした研究集会を若手主導で開催。農村・国土計画小委員会は、岐阜・長良川の鵜飼を文化的景観としてとらえるという視点から春期学術研究会を開催。災害復興小委員会は、熊本地震の現地地区セミナーを農村計画学会と共同で開催し、『東日本大震災合同調査報告・建築編9 社会システム／集落計画』をまとめ上げた。

そのほか、本委員会主催行事(アジア研究フォーラムWG)として、日韓交流会も15回目を迎え、金沢市民芸術村で「伝統文化・田園資源と建築・地域デザイン—金沢・加賀、韓国からの発信—」をテーマに開催した。そのほか、計画系4委員会が共同主催する住宅系研究報告会を10年にわたって継続している。

農村計画委員会は、設立当初より、農村住宅・地域施設から集落・地域、国土に至る生活空間を対象に、地域と生活に根ざした総合的で実践的な計画学の確立を志向してき

た。「農村計画は、狭義の農村のみを対象とする計画ではない」「農村は、持続可能な社会と生活空間の学校であり、未来社会のモデルである」という認識のもとで、次世代計画学の構築につなげる学会ならではの活動を進めている。



図1 大会農村計画部門研究協議会資料のアーカイブ化



図2 「住み継ぐカタチ」全国行脚・連続研究会